

I 実践

1 研究主題

心豊かな児童の育成を目指した人権教育

～一人一人を大切に第1学年の学級経営を通して～

(1) 主題設定の理由

本校では、「児童一人一人の可能性と人間性の基盤づくりのために」を基本理念として、知（かしこく）徳（なかよく）・体（たくましく）の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図っている。それを受けて人権教育では、「人権教育の目標や内容等を、各教科・道徳・特別活動の特質に応じて、指導計画に適切に位置付け、指導の充実に努める」を目標の一つとしている。

そこで、学級活動や生活科の時間、道徳の授業の充実を中心に、様々な体験や学習を通して思いやりの心情を養うとともに、分け隔てなく誰とでも仲良くできる児童の育成を図っていきたいと考え、本主題を設定した。

(2) 主な研究内容

ア 一人一人が安心して楽しく過ごすことのできる学級づくり

イ 学級の実態を把握し、心の教育の充実を図る道徳の授業

ウ 人権教育の目標を基盤にした教科指導

2 実践内容

(1) 一人一人が安心して楽しく過ごすことのできる学級づくり

ア 握手であいさつ、朝の会・帰りの会

朝の出会いと帰りは、一人一人と握手をしてあいさつしている。一日のスタートには「元気に登校できてよかった、あなたに会えてうれしい」一日の終わりには「一日よくがんばったね」とそんな気持ちを含めて、声をかけている。朝の会や帰りの会では、スピーチを行い、相互理解に役立てている。

イ 連絡帳の活用「せんせい あのね」

連絡帳を使って「せんせい、あのね」という交換日記を行っている。先生に話したいこと・よかったこと・うれしいこと・こまったこと・家でのこと・学校でのこと・感じたことや考えたこと、何でも書いてよいことになっている。個人差はあるが、児童理解や児童との関係の深化に役立っている。連絡帳なので、保護者も読むことができる。保護者からの相談や感想も寄せられている。

ウ 誕生会

「おたんじょうびおめでとう」の会を行っている。ハッピーバースデーを歌い、大きくなったら何になりたいかを発表し、質問コーナーでは友達から質問をうけ、給食の時間には牛乳で乾杯をする。みんな、とても楽しみにしている。主役になって過ごせる時間が誰にも巡ってくる。

エ 学級のめあて「なかよく」に向かって

学級のめあてには「なかよく」を掲げている。「1年生になったら 友達100人できるかな～」と歌にあるように、児童は友達をたくさんつくりたいと願っている。しかし実際には、休み時間でも生活のなかでもトラブルが絶えない。児童同士の相互の関係をつくる力が不十分なためのトラブルだと思われる。児童の訴えをよく聞き、友達同士で話し合って解決できるようにサポートしてきた。きょうだいも少なく、トラブルの経験自体が少ない児童が多いので、トラブルを避けるというよりも、トラブルを経験しながら成長できるようにと願いながら指導している。また、教室に人権コーナーを設置し、友達への感謝のメッセージや道徳の感想などを掲示して交流している。

(2) 学級の実態を把握し、心の教育の充実を図る道徳の授業

ア「はしのうえのおおかみ」(学研) 2－(2) 思いやり・親切

一本橋の上で、次々と渡ってくる自分より弱い動物たちに意地悪をして面白がっていたおおかみが、自分より強い熊に出会った。その熊に、親切にされたおおかみは、それから、他の動物に優しくするという内容である。おおかみの心の変容を捉え、親切という行為について考えさせることをねらいとしている。授業では、役割演技を取り入れた。いばってみんなを追い返しておもしろいという場面と、親切にしてあげてみんなにお礼を言われてよい気持ちを感じる場面で、おおかみと弱い動物たちの両方の役を誰もが体験してみた。役割演技をしたことにより、ねらいとする価値をより実感できたのではないと思われる。

イ「くりのみ」(学研) 2－(3) 友情

秋の終わりの寒い日、食べ物を探しに行ったうさぎときつね、帰り道で、きつねはドングリをいっぱい見つけたのに「腹ぺこだ」と嘘をついてしまう。そしてたった二つ見つけた栗の実の一つを差し出すうさぎを見て、きつねは涙をこぼすという内容である。つい嘘をついてしまったり欲張りをしてしまったりすることは児童によくあることなので、きつねの気持ちによりそって考えることができた。「友達と仲良くし、助け合おうとする心情を育てる」というねらいであったが、友達の大切さや誠実に接したいという思いを強くすることができた。様々な経験が出され、これからも友達を増やしたという思いをもたせることができた。

(3) 人権教育の目標を基盤にした教科指導

ア 豊かな心を育てる読み聞かせ

図書の時間には、司書の先生からお話会として読み聞かせを継続して実施していただいている。4月には6年生が朝の時間にお世話にきてくれ、校歌を教えてくれたり、紙芝居をやったりしてくれた。また、読書週間には、図書委員会の活動で、読み聞かせがあった。PTAの文庫委員の計画により、お母さんたちがクラスを訪問してくれた。〇〇さんのお母さんに読んでもらう楽しみがあった。読み聞かせの効果は勿論だが、様々な人との交流も、豊かな心につながったと考えている。

イ 生活科での自然観察、飼育・栽培活動

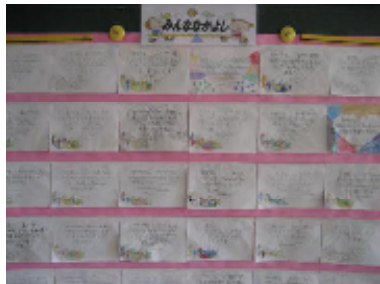
自然との関わりの希薄な子どもたちが、季節を感じたり虫や花などの生命にふれたりできるように、年間を通して計画的・継続的な活動の展開を図ってきた。教室やベランダ、校庭など、身近なところでたくさんの小動物や植物とふれあえるようにすることで、思いやりや自他の命を大切にすることを心がけることができるのではないかと考えたからである。

春、教室の虫かごの中の蛹からキアゲハが羽化していった。校庭の桜を見て、小鳥の声を聞き、足下のタンポポやツクシなどを摘む、お散歩と称する自然観察は一番の楽しみになった。桜が散り若葉が芽吹き、大雨の日には雨のしぶきや運動場の水たまりや雲の様子を観察し、太陽がじりじり照ってくると「入れるかなあ」とプールを眺めた。秋には、木の葉が色づき、草むらのバッタやコオロギとふれあい、空の色・山の色の変化に気づき、12月には、ビオトープにはった氷で遊んだり図工でつくったかざわを転がして北風を感じたりした。「みつけたよ」(観察記録用紙)にかきたいと、児童から声が出るようになった。イモリやザリガニを水槽で飼育したり、一人一鉢でアサガオも栽培したりしてきた。アサガオの栽培では、発芽から、葉、花の観察は勿論、めしべの元に種の粒を見つかったり、熟す前の種の中に小さな双葉を発見したりして、アサガオの命のつながりを実感した。枯れた茎や根の観察では、「今までありがとう、種は春になったら蒔くからね」という言葉が子どもたちから自然に出てきた。枯れた茎を使ってリースを作った児童もいた。

虫が怖くて触れられなかった児童も多かったが、このような姿から、生き物や植物を観察したり育てたりすることを通して、小さな生き物の命を実感でき、命の強さや弱さに気づいたり、自然の大切さや小さな命を大切にしようとする思いを確かにすることができたのではないかと考えている。



(道徳：くりのみ)



(人権コーナー)



(生活科：かぜっておもしろい)



(生活科：あさがおさん ありがとう)



(最後の観察)



(種の中に双葉)

3 成果

限られた時間と場所での体験や学習であったが、児童は自然や生き物と関わる体験を通して、自然の美しさに目を向けるようになり、たくさんの命の輝きを感じることで、優しい気持ちが育ってきている。また、友達との関わりの中で失敗や間違いがあってもごまかしたりせずに正直に自分を見つめ直すことができ、何事も諦めずにがんばっている姿が見られる。相手の気持ちを考えたり励まし合ったりする様子も以前より増えたように感じている。学習・生活全般を通して、友達のよさを発見し誰とでもなかよくしようとする姿勢が育ってきている。

II 今後の課題

子どもたちの人権意識を高めるためには、日々の学校生活の中で、児童一人一人が、「人・もの・こと」との関わりの中で、人としての生き方・感じ方のよさを求めていけるような場の設定を行っていききたい。そして、新たな発見や気づきをつくり出せるように児童の実態に合った具体的な体験活動を組み入れたり、意図的に学習活動の構成・展開を図ったりするようにしていきたい。